祖父母が営む世代間関係をどうとらえるか
――「個人的選好」としての側面への着目――

小野寺 理 佳

≪ キーワード ≫

祖父母、祖親性、祖親期、世代間関係、選好、家族ライフスタイル

≪ 要　旨 ≫

本稿の目的は、現代社会における祖父母のありようを知るための視角と方法を探究することである。日本における祖父母研究の動向をアメリカにおける先行研究と比較検討した結果、以下の2点が指摘された。ひとつめは、祖父母という地位が「役割」として理解される傾向があること、ふたつめは、祖父母と老年者を同一視する傾向が特に強く、祖父母の意志的・能動的な側面に着目する研究に結びつかなかったことである。家族の多様化・私事化・個人化といった変動が、一般論としての祖父母役割の議論と現実の世代間関係のあり方とが必ずしも一致しない状況をもたらしていることは明白である。家族変動を生きる祖父母が営む関係性の実態を知るには、個人という視点からみた祖父母の主観的な選択に着目し、祖父母が相手との交渉を通じて関係を構築していく過程をみていくことが必要と考えられる。つまり、「祖父・祖母であること」は、「役割」(roles) としてではなく、「関係性」(relationships) としてとらえられなければならない。それは、祖父母を受動的な存在として把握するのではなく関係性を構築する主体的存在として把握することを意味する。このとき、「家族ライフスタイル(family lifestyles)」論的アプローチが多くの示唆を与えてくれる。祖父母の生涯発達という視点にたち、祖父と祖母の比較検討をおこなうことに留意しながら祖親性をとらえていくことは、長寿時代における祖父母世代の生き方の新しい方向性を知り、我々が彼らのQOLの向上のために何ができるのか・何をすべきなのかを考えるための基盤となるだろう。

1. はじめに～なぜ祖父母世代か

家族の多様化・私事化・個人化といった一連の動きのなかで、今般、祖父母世代への関心が次第に強まる傾向にある。それはなぜか。ひとことでいうなら、世代間関係における祖父母の意味や働きの変化がその大きな理由である。というのも、社会制度としての核家族の衰退や、中高年人口の変化による世代間関係の長期化は、多世代にわたる紐帯の重要性を増大させつつあると考えられるからである。晩婚化・非婚化や少子化は、たしかに、祖父母の地位に就く機会を減少させるが、その一方で、例えば、離婚や再婚の増加がstep-grandparentingのような新しい関係を生み出しているのも現実である。Bengtsonは、アメリカ社会において今後、個人や家族にとって二世代以上にわたる関係が一層重要なものとなり、そうした関係はその構造や機能においてますます多様なものになるであろうことを指摘し、それが核家族の機能にとって代わる可能性をも示唆する［Bengtson 2001］。

同時に、世代間関係における祖父母の意味や働きの変化とは、個々人にとっての祖父母経験の内実が変化することでもある。現在の祖父母の多くは、自らが結婚して家族を形成する際に家族変動の第一の段階（＝近代家族化）を経験し、祖父母になるときに第二の段階（＝近代家族の揺らぎ）を経験するといわれる［安藤 2001］。従って、近代家族の規範（例えば、性別役割分業）を内面化したと考えられる祖父母世代が、そ

れとは相容れないような家族の揺らぎのなかで、その価値観やライフスタイルをどのように変化させるのか、という点が解明されなければならない。

本稿では、以上のような文脈から、現代社会において祖父母が営む世代間関係を知るために有効と思われる視角として、世代間関係の「個人的選好」としての側面に着目することの重要性を考える。

2. 祖父母世代をどうとらえるか

まず、先行研究の検討にさきだって、祖父母世代とはどのような存在なのかを確認しておく。「祖親性」(grandparenthood) という語は、基本的には「祖父母になること、祖父母であること、祖父母としてふるまうこと」の意であり、祖父母という地位に関わるすべて、祖父母が取り結ぶそれぞれの関係性をあらわす。また、「祖親期」とは、文字通り「祖父母という地位にある時期」の意である。最初の孫の誕生から、孫が生きているかぎり、祖父母の死亡までの期間をさす。ここで注意が必要なのは、祖父母・祖親性・祖親期を、高齢者・高齢者であること・高齢期と同一視してはならないことである。なぜなら、祖父母とは関係的カテゴリー、つまり、「他者をそのカテゴリーで把握することが、同時に自分とその他者との関係を規定することでもあるようなカテゴリー」であり、類型的カテゴリーではないからである［江原 1995 277］。祖親期と高齢期は個人の人生のうえでしばしば同時期に出現するために混同されることも多く、これまで祖父母を取り上げた研究の多くが老年学（Gerontology）に分類されてきたが、本来、これらは同義ではない点に留意しなければならない[1)]。

3. 祖親性に関する先行研究

わが国においては、「祖父母であること」それ自体を中心テーマとした研究は緒に就いたばかりである。そこで、以下においては、祖親性研究の先達であるアメリカにおける近年の研究動向および日本における祖親性研究周辺の諸研究をみていくことにする。

3.1. アメリカにおける祖親性研究

アメリカにおける祖親性研究は1950年代から、まず祖親性の類型化を中心に展開する。つまり、祖父母と孫との関係性を、役割の相違、責任の所在、権威の有無、情緒的な親密性の程度や有無などの視点から分類するものである。よく知られているところでは、Neugarten & Weinstein［1964］による5類型、Robertson［1977］による4類型がある[2)]。この他、孫に対して祖父母が抱く認識の類型化［Kivnick 1982；Crawford 1981］、孫からみた祖父母役割の類型化［Kornhaber & Woodward 1981］などが試みられてきた。これら1980年代初期までの研究に通底するのは、祖父母は、「存在そのもの」に象徴的な意味があるとの認識である［Hayslip Jr.& Goldberg-Glen 2000］。

しかし、1980年代中盤以降、シングルペアレントの家庭、それも未婚の10代の母親が営む家庭の増加、そして理念上の変化としては結婚観の変容を背景として、孫の親の育児能力の欠如（死、離婚、薬物濫用、アルコール依存、子ども虐待、投獄など）によって孫育てをひきうけざるをえなくなった祖父母の増加が社会問題として指摘されはじめる［Hayslip Jr. & Goldberg-Glen 2000］。こうした状況は階層的偏りをもって出現したものではあったが、家族の危機・家庭の危機として広く認識されたところから、祖父母と子・孫との様々な関係性への関心が高まった。具体的には、親族ネットワーク全体からみた祖父母と孫との関係性の動態、祖父母の健康状態・雇用状況の変化が関係性にもたらす影響、離・再婚（孫の親の離・再婚、祖父母自身の離・再婚）とstepgrandparenthood、surrogate parenting（祖父母による孫の養育）、ジェンダーやエスニシティのインパクトなどが研究課題として掲げられている［Szinovacz 1998 a；Journal of Family Issues Volume 22(5) 2001］。

その一方で類型化研究も継続される［Kornhaber 2002；Westheimer & Kaplan 2000］[3)]が、かつてのように祖父母を単純化された類型に分類することを主眼とするのではなく、祖父母と孫の多様な関係性のなかで祖父母が担いうる働きやポジションを整理・検討することで、両者がより豊かな関係を結ぶことを目的としている点で新しいといえる。さらに、祖親性の実態を探るだけにとどまらず、祖父母のための教育プログラム［例えば、Strom 1991/1993］やサポートプログラム（公的な経済援助、孫を養育する祖母のためのレスパイトケアやセラピー、GAP（Grandparents as Parents）のような自助グループなど）に関する研究も広く展開されている。

3.2. 日本における研究動向

まず、二世代・三世代関係の研究についてみる。そのいずれにおいても、同居生活における生活分離(度)、別居における交流頻度・接触頻度、あるいは、同・別居における扶養・援助・相互援助、情緒的関係性、イメージや役割期待などが、1970年代以降主な研究対象となってきた［玉里 1995；牧野 1994］。次いで80年代には、「親族ネットワーク」「世代間関係」という研究関心が現れはじめる。この時期になると、孫の発達、孫の親にとっての援助資源という視点から祖父母の影響力や役割に着目する研究がいちだんと増えてくる［落合 1989；高橋 1995］。母子保健分野における研究も同様の視点設定であった。これらの諸研究を概観すると、総じて視点は子・孫の側にあり、祖父母が子や孫のためにどのくらい役立っているのかが主な関心事となっている点が注目される。

こうした研究傾向に対して、祖親性研究の意義を探る論考［安藤 1989；杉井 1993］が現れ、続いて、祖父母に視点を据えた実証的な研究が登場する。しかし、そこにおいても、祖父母は「子や孫との直接的な関わりが多ければ多いほど満足する存在」という固定的なイメージに則って描かれることに変わりはない（杉井ほか 1996；北村 1999；財津 1995)。祖父母の多様なライフスタイルによって孫との関係性の構築のされ方や意味づけが変わりうることを指摘する研究はまだ少ない［安藤・高橋 1992；安藤［1994］2001；清水 1995］。

次に、高齢者研究の範疇で祖父母の地位にある老年者の世代間関係が扱われている研究についてみてみよう。高齢者研究の進展とともに「高齢期の家族関係」「高齢者と家族」といった研究テーマがさかんに取りあげられるようになったが、そこにおいては、高齢者の同居や扶養が研究テーマの主流を成していた。この傾向は1970年代はもとより、1980年代に入ってからも基本的には維持され［樽川 1984；横山・古谷野 1993］、世代間の関係性は、個人と個人との関係というよりも、祖父母家族と子ども家族との関係として描かれてきた［松田ほか 1993］。加えて、祖父母が中年にはじまるキャリアであるにもかかわらず、祖父母＝老年者の図式が自明とされてきた結果、「援助され庇護される受動的・依存的な存在」という高齢者イメージが祖父母にも付与されることへつながったのである［安藤 1989］。少子高齢社会を迎え、高齢者・老年者の研究は激増し、老年期における家族・親族あるいは地域・友人のネットワークへの関心も高まりつつある［河合・下仲 1990］。「個としての高齢者」［安達 1999］のように、自立的創造的高齢者としての視点をとる研究も増えつつある［小倉 1996］。しかしながら、祖親性とは高齢者を構成する一部でしかないことから、祖父母の地位にある高齢者がいかなる世代間関係を結び、その関係においていかに自立した立場を模索し、いかにそれを享受しているのか、に焦点をあわせた研究の蓄積はそれほど充実しているとはいえないのが現状である。

4. 新しい祖父母像をとらえるための視角と方法

4.1. 先行研究の批判的総括

以上、日本の既存研究を総括するならば、次の2点を指摘することができる。まず、1点目は、祖父母をとらえる従来の枠組みにおいては、祖父母という地位がその「役割」即ち「文化・伝統・歴史を背景とした社会習慣的な規範と、身体的・経済的・時間的諸条件といった個別の客観的な状況によって主に規定されるもの」として理解され、祖父母と子・孫との個別的な「関係性」即ち「上記の規範や諸条件の下、個々の主体的な意志に基づいて選び取られる多様な結びつき(bonds）のありよう」［Kivett 1991 285］として扱われてこなかったことがあげられる。子・孫との同・別居の別が重視され、同居であれば親密度が高く別居であれば親密度は低いという単純な見方が支配的であったことや、一般に子・孫世代との接触量が相対的に多いと考えられている祖母に焦点があてられてきたことは、ともに「役割」としての祖父母把握に由来するものといえる。従って、祖父母の存在意義も、子・孫世代の具体的必要を充足させるだけの役割が果たされているか否かという点からのみ注目される傾向にあり、事象ごとに祖父母の情緒面の動向や行為の選択性を探る作業はなされてこなかった。2点目としては、安藤［1989］が強調するように、日本においては祖父母と老年者を同一視する傾向が特に強く、祖父母の意志的・能動的な側面に着目する研究に結びつかなかった事情があげられよう。

しかるに、長寿化・ライフスタイルの多様化など家族をめぐる様々な変化が、祖親性の類型化研究の限界、即ち、一般論としての祖父母役割の議論と現実の世代間関係のあり方とが必ずしも一致しない状況をもたら

していることは明白である。従って、それらが家族変動を生きる祖父母像を的確にとらえるものであったとはいいがたい。

4.2. 個としての選好性をとらえる視角

さて、個人の主体性や選好性を重視する分析枠組を設定するにあたっては、「家族ライフスタイル（family lifestyles)」論的アプローチ［野々山 1999；春日井・片岡 2001］が多くの示唆を与えてくれる。「家族ライフスタイル」とは、「家族生活に関する生活諸関係ならびに生活諸資源についての個人ないし家族成員の自主的な選択行動のパターン」［野々山 1996 294］と定義される。それは、「制度や規範や理念等によって予め規定されてしまってはいない」ものであり、「むしろ個々の家族成員の家族ライフスタイルへの選好を前提にして成員間の合意に基づく任意的選択、それも経験の積み重ねという展開のなかで時間的経過とともに常に変化する可能性のある選択としての家族行動パターン」なのである［野々山 1999 170］。「生活諸関係」には、夫婦、親子、近親、友人、近隣の関係などが含まれ、「生活諸資源」には、時間、空間、収入、財産、環境などが含まれる。これは、家族を構成する個人をひとりの生活主体としてとらえ、それぞれが多様な家族生活の創造に参加する側面に着眼した概念である。

本研究の関心対象である祖親性はこの家族ライフスタイルの下位概念という位置づけとなろう。これまで述べてきたところから明らかであるように、祖親性、即ち、祖父母であることは、個人的な選好や主体的な意志が発揮されるなかで構築される中高年期のキャリアとして想定されうるものであり、問われるべきは、世代を超えて構築されるライフスタイルとしての関係性ということになる[4]。祖父母世代が、自らの内に根づいている規範意識と折り合いをつけながら、選択的、主体的に多様な関係性を構築している過程を描きだしていくことは、向老期における家族の「再構築」をとらえることであり、家族（と呼ばれるもの）が生涯を通じて変わり続けるものであることを確認する作業といえる[5]。

その際重要なこととして、2点あげておかねばならないだろう。ひとつは、中高年者の生涯発達において祖父・祖母であることはどのように経験され認識されているのかという視点をもつことである。孫の発達段階との関わりに注意が必要である。もうひとつは、祖父と祖母の比較検討をおこなうことである。ジェンダーの視点を取り入れた祖親性研究はすでに試みられてはいるもののまだ極めてわずかであることから［河合・下仲 1990； 前原ほか 2000］、個としての祖父・個としての祖母、祖父母の夫婦としての関係性への視点、あるいは、祖父・祖母と孫の性別・孫の母親（実娘か息子の配偶者か）を組み合わせた関係性への視点が一層重要となろう［Szinovacz 1998 b；Spitze & Ward 1998］[6]。

4.3. 方法

家族ライフスタイルの多様化を考察する際には、「それが個人の選好動機に基づいて選択された家族ライフスタイルなのか、それとも規範拘束的または集団拘束的に強いられた、あるいは状況妥協的にやむなく受け入れざるを得なかった生活様式なのかという区別が重要となる」［野々山 1999 173］。従って、その選択が主体的な選択であったのかどうかを、質的に問うことが必要になる。そのためには、関係性の構築の「過程」そのもの、あるいはそれらが変化する「過程」を詳細に探究しなければならない。これはアメリカにおける先行研究批判においても今後の課題としてあげられている点である。そして、関係性の構築の過程をとらえるにあたって肝要なのは、祖父母や子世代一家の属性（各世代の年齢、性別、収入、学歴、職業階層など）のみならず、生活歴、日常生活（就業、趣味、家事)、家族の他の成員との関係、交友、老後の設計などと関わらせながら、規範意識、役割意識、満足度といったものを頼りに、世代間関係意識にふみこんでいくことである。このとき、本音を引き出し、さまざまな感情や意識が絡まり合うなかから祖父母の求めるもの・意図するものを見いだしていくためには、質的データの活用が最もふさわしいと思われる。つけ加えるならば、先行研究が少ない現状においては、調査には仮説探索的な意味も与えられている。質的データの有効性は、個に着目した高齢期家族研究［安達 1999］や高齢期社会化に関する論考［小倉 1996］においても同様に指摘されており、「個」を扱ううえでは極めて役立つ方法と評価されうる。

5. おわりに

長寿化は、それ以前の祖父母世代が望んでもかなわ

なかったこと、即ち、孫の幼年期のみならず成人期以降を共に生きることや曾孫を抱くことをも可能にした。しかしながら、近年、超高齢社会における祖父母世代については、「孫のためのケアギビングを引き受けること」と「長期化した高齢期を自分のために使うこと」というふたつの課題のいずれを優先させるべきか、といった議論も登場している［Robertson & Johnson 1997］。というのも、高齢期の自立を標榜する社会は、祖父母世代に対して、自立（身体的・精神的・経済的）を実現させること、あるいは、実現のための準備をすることを求めるからである。祖父母がそれを自ら選び取るとしても、多世代の紐帯としての重責と自立（あるいは自立準備）とは両立しうるのかという問題は重い。

このような祖父母がスタンダードとなってきた状況において、我々には、祖父母の新しいライフスタイルの可能性を探っていくつとめがあると思われる。そのためには、家族あるいは世代間関係をめぐる従来の見方を相対化し、個としての祖父母がいかに主体的に関係性を構築していくのかを追究する必要がある。これらの研究の蓄積をもって、家族・親族関係の変容がこれからどのように展開されていくのか、その行く末を探ることが可能となる。そのことは同時に、長寿時代における祖父母世代の生き方の新しい方向性を知り、我々が彼らのQOLの向上のために何ができるのか・何をすべきなのかを考えるための基盤となるであろう。

〈注〉

1）現実には祖父母となるのは50代から60代であることが多い。東京都老人総合研究所心理学部門「中年からの老化予防総合的長期追跡研究」報告書 中年からの老化予防に関する心理学的調査第1回一斉調査(1991)。

2）Neugarten & Weinsteinによる5類型は、formal、fun-seeking、parent surrogate、wisdom、distant figure、Robertsonによる4類型は、apportioned、symbolic、individualized、remoteである。

3）Kornhaberによる孫から見た祖父母の役割は、ancestor、buddy、hero、historian、mentor、nurturer、role model、spiritual guide、student、teacher、wizardの11パターン、Westheimer & Kaplanによる類型は、family historian、model、teacher、confidant、safty netの5パターン。

4）親子関係について、ギデンズは「親子の関係性に影響を及ぼす決定的な力は、自己投入(コミットメント)の積み重ねの生成というかたちで記述できる」［ギデンズ 1995 訳書147］と述べる。これを祖父母と孫の関係に敷衍するならば、祖父母にとっての親密な他者のなかで孫の占める位置が常に上位にあるとはかぎらないということにもなりうる。今日の祖親性は、少数の孫との長期的な関係のうえに築かれ、なおかつ、その関係性は選好的に形成されるという理解が妥当と思われる。

5）近年は、個人が家族と認識する関係性が各々で異なることから、家族についての主観的境界を重視する考え方も支持を得てきている［木戸 1996； 西野 2000］。

6）これまで祖父の祖親性にはあまり注目されてこなかったが、例えば、母子家庭の増加が父親役を務める祖父の増加に結びついているとの指摘［Westheimer & Kaplan 2000 60］もあることから、祖父・祖母各々の祖親性の新しいありようをみていく必要があろう。

〈文献〉

安達正嗣 1999『高齢期家族の社会学』世界思想社.

安藤究 1989「祖親性研究序論　社会変動と祖親性研究」『上智大学社会学論集』14：pp.105-130.

安藤究・高橋勇悦 1992「大都市高齢女性の祖母性」『総合都市研究』45：pp.97-116.

安藤究 ［1994］2001「新しい祖母の誕生？」森岡清志・中林一樹編『変容する高齢者像ー大都市高齢者のライフスタイル』東京都立大学出版会（復刻版）：pp.79-118.

安藤究 2001「祖親性（grandparenthood）の国際比較における課題」『鹿児島国際大学福祉社会学部論集』20(2)：pp.1-15.

Bengtson, V.L. 2001 Beyond the Nuclear Family : The Increasing Importance of Multigenerational Bonds, Journal of Marriage and the Family, 63：pp.1-16.

Crawford, M. 1981 Not disengaged : Grandparents in literature and reality,an empirical study in role satisfaction, Sociological Review, 29：pp.499-519.

江原由美子 1995「男性の老い、女性の老い」多田富雄・今村仁編『老いの様式』誠信書房：pp.258-281.

Giddens, A. 1992 The Transformation of Intimacy:Sexuality,Love and Eroticism in Modern Societies, Polity Press（松尾精文・松川昭子訳 1995『親密性の変容　近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』而立書房）.

Hayslip Jr., B. & R. Goldberg-Glen 2000 Grandparents Raising Grandchildren : Theoretical,Empirical, and Clinical Perspectives, Springer Publishing Company.

Journal of Family Issues, Volume 22(5) 2001 devoted to；Grandparent-Grandchild Relationships,Part 2.

春日井典子・片岡佳美 2001「家族ライフスタイル論的アプローチ」野々山久也・清水浩昭編『家族社会学の分析視角　社会学的アプローチの応用と課題』ミネルヴァ書房：pp.303-323.

河合千恵子・下仲順子 1990「老年期における家族――老人とその配偶者、子世代、孫世代の対人関係についての心理学的アプローチ――」『社会老年学』31：pp.

12-21.
木戸功 1996「それは家族であるのか、家族ではないのか、ではどうすれば家族であるのか」『家族研究年報』21：pp.2-13.
北村安樹子 1999「家族における世代間交流——祖父母にとっての孫の存在」『LDI レポート』106：pp.27-53.
Kivnick, H. Q. 1982 Grandparenthood : An overview of meaning and mental health, The Gerontologist, 22：pp.59-66.
Kivett, V. R. 1991 The Grandparent-Grandchild Connection, Marriage & Family Review, 16：pp.267-290.
Kornhaber, A & K.L.Woodward 1981 Grandparents/grandchildren, Anchor.
Kornhaber, A. 2002 The Grandparent Guide:The Definitive Guide to Coping with the Challenges of Modern Grandparenting, Contemporary Books.
前原武子・金城育子・稲谷ふみ枝 2000「続柄の違う祖父母と孫の関係」『教育心理学研究』48(2)：pp.120-127.
牧野カツコ 1994「三世代関係の良否をとらえる」『家族関係学』13：pp.51-61.
松田智子・岡村清子・横山博子・安藤孝敏・古谷野亘 1993 「老親子関係の分析単位を個人にすることの方法論的有効性」『老年社会科学』15(1)：pp.30-35.
Neugarten, B. L. & K. K. Weinstein 1964 The changing American grandparent, Journal of Marriage and the Family, 26：pp.199-204.
西野理子 2000「家族の認知に関する探索的研究」『家族研究年報』25：pp.43-56.
野々山久也 1999「現代家族の変動過程と家族ライフスタイルの多様化」目黒依子・渡辺秀樹編『講座社会学・第2巻・家族』東京大学出版会：pp.153-190.
野々山久也 1996「家族新時代への胎動」野々山久也・袖井孝子・篠崎正美編著『いま家族に何が起こっているのか』ミネルヴァ書房：pp.285-305.
落合恵美子 1989「育児援助と育児ネットワーク」『家族研究』1：pp.109-133.
小倉康嗣 1996「高齢期社会化の新たな様相への探索的アプローチ」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』43：pp.1-10.
Robertson, J. F., 1977 Grandparenthood : A study of role conceptions, Journal of Marriage and the Family, 39：pp.165-174.
Robertson, J. F. & C. L. Johnson 1997 Should Grandparents Assume Full Parental Responsibility?, Scharlach, A. E. & L. W. Kaye (eds.) Controversial Issues in Aging, Allyn & Bacon：pp.173-184.
清水美知子 1995「祖父母と孫のかかわりに関する研究——「孫育て」をめぐる祖父と祖母のライフスタイル——」『長寿社会研究所・家庭問題研究所研究年報』1：pp.67-80.
Spitze,G. & R. A. Ward 1998 Gender Variations, M. E. Szinovacz (ed.) Handbook on Grandparenthood, Greenwood Press：pp.113-127.
Strom, R. & S. Strom, 1991 Grandparent Education : A Guide for Leaders, Sage Publications.
Strom, R. & S.Strom, 1993 The Grandparent Strengths and Needs Inventory, Scholatic Testing Service.
杉井潤子 1993 「『祖親性』研究——『祖父母』の意義再考——」『大阪市立大学児童・家族相談所紀要』10：pp.59-74.
杉井潤子・堀智晴・泊祐子・早川淳 1996「祖母の『孫育て』に関する研究——主観的幸福感との関連において——」『家族関係学』15：pp.89-102.
Szinovacz, M. E. 1998 a Grandparents Today : A Demographic Profile, The Gerontologist, 38：pp.37-52.
Szinovacz, M. E. 1998 b Grandparent Research : Past, Present, and Future, M.E.Szinovacz (ed.) Handbook on Grandparenthood, Greenwood Press：pp.1-20.
高橋博子 1995「育児をめぐる世代間交流」青木和夫編『高齢化社会の世代間交流』長寿社会開発センター：pp.84-115.
玉里恵美子 1995「親子関係研究の動向(その2)「成人子」親子関係を中心に」『龍谷大学社会学部紀要』6：pp.50-58.
樽川典子 1984「老年期の家族役割と夫婦関係」副田義也編『日本文化と老年世代』中央法規出版：pp.149-194.
Westheimer, Ruth K. and S. Kaplan 2000 Grandparenthood, Routledge.
横山博子・古谷野亘 1993「老年期の家族に関する研究 80年代の動向と今後の展望」『家族関係学』12：pp.73-78.
財津庸子 1995「これからの高齢者と子育て」九州家政学総合研究会編『高齢者生活文化の創造』九州大学出版会：pp.107-123.

（おのでら・りか　北海道大学大学院教育学研究科）